

三木市ヤングケアラー実態調査 調査結果報告書

令和8年3月

三木市健康福祉部こども福祉課

目次

| | |
|--------------------------|----|
| 1.調査の概要 | 3 |
| (1) 調査内容 | 3 |
| (2) 調査対象・回収数 | 3 |
| (3) 調査手法 | 4 |
| (4) 調査期間 | 4 |
| 2.調査の結果 | 5 |
| (1) お世話をしている家族の状況 | 5 |
| (2) お世話の内容 | 6 |
| (3) お世話をすることによる学校や生活への影響 | 7 |
| (4) お世話をすることの大変さ | 8 |
| (5) 相談したことの有無（相談相手） | 9 |
| (6) 周囲に期待する支援 | 10 |
| (7) ヤングケアラーの認知度 | 11 |
| (8) 支援を広げるために必要と思うこと | 12 |
| 3.考察 | 14 |

1 調査の概要

(1) 調査目的

市内の児童生徒における家族の世話の状況や、それに伴う日常生活への支障、ニーズ等を把握し、ヤングケアラーの早期把握と支援策の検討を行う。

(2) 調査対象・回収数

| 区分 | 対象者数 | 有効回答者数（回答率） |
|---------|--------|-------------|
| 小学6年生 | 551人 | 500人（90.7%） |
| 中学2年生 | 593人 | 472人（79.6%） |
| 高校生年齢相当 | 1,795人 | 2人（0.1%） |

1 調査概要

(3) 調査手法

- 記名式のアンケート調査で、Web環境から任意で回答を依頼した。
- 先にヤングケアラーについて正しく知るための動画を視聴し、その後回答する手順とした。

(4) 調査期間

令和7年10月1日から11月15日

※各表、グラフなどに使う「n」は、各設問に対する回答者数。



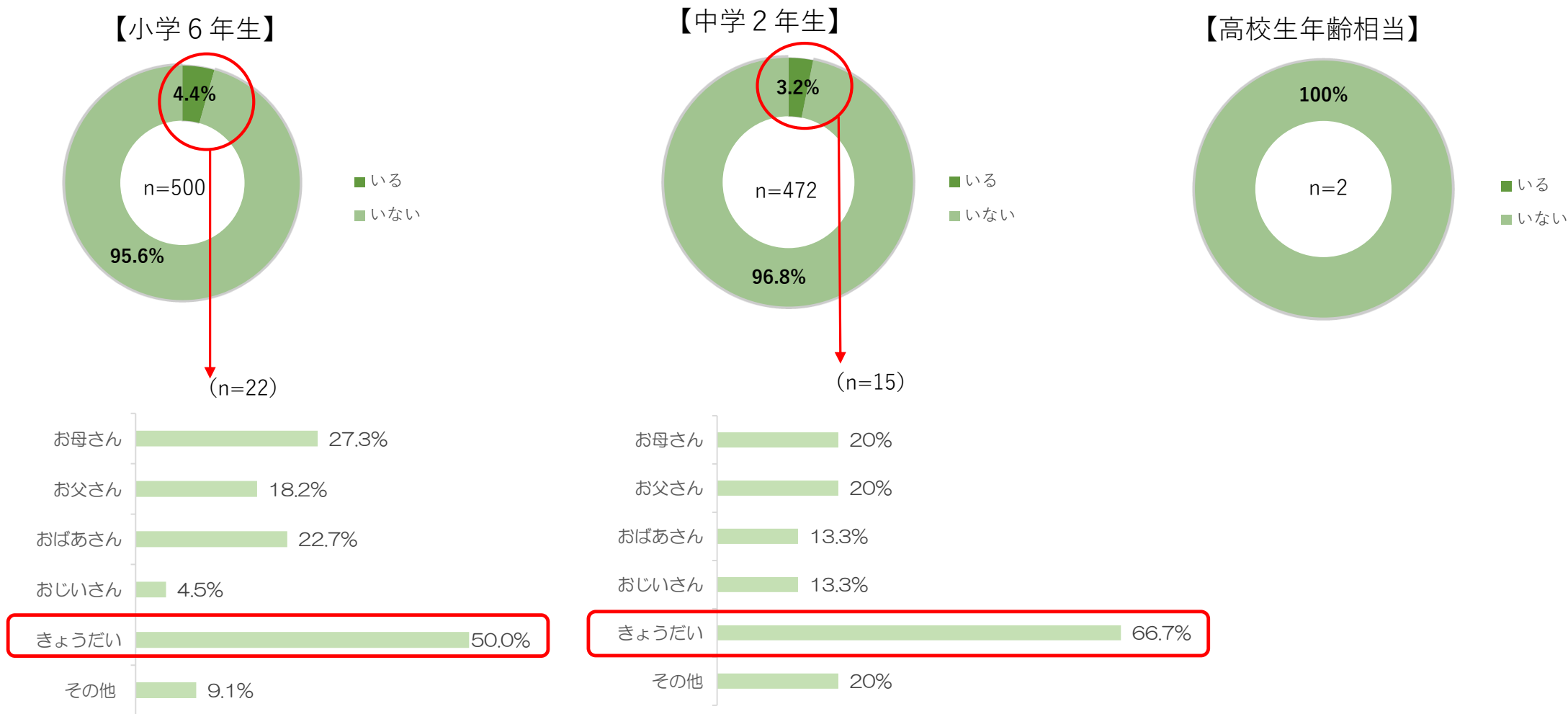
イラスト：こども家庭庁HP



2 調査の結果

(1) お世話をしている家族の状況

お世話をしている家族がいると回答したのは、小学生4.4%（22.7人に1人）、中学生3.2%（31.3人に1人）、高校生相当0%。きょうだいのお世話をしている割合が高い傾向。



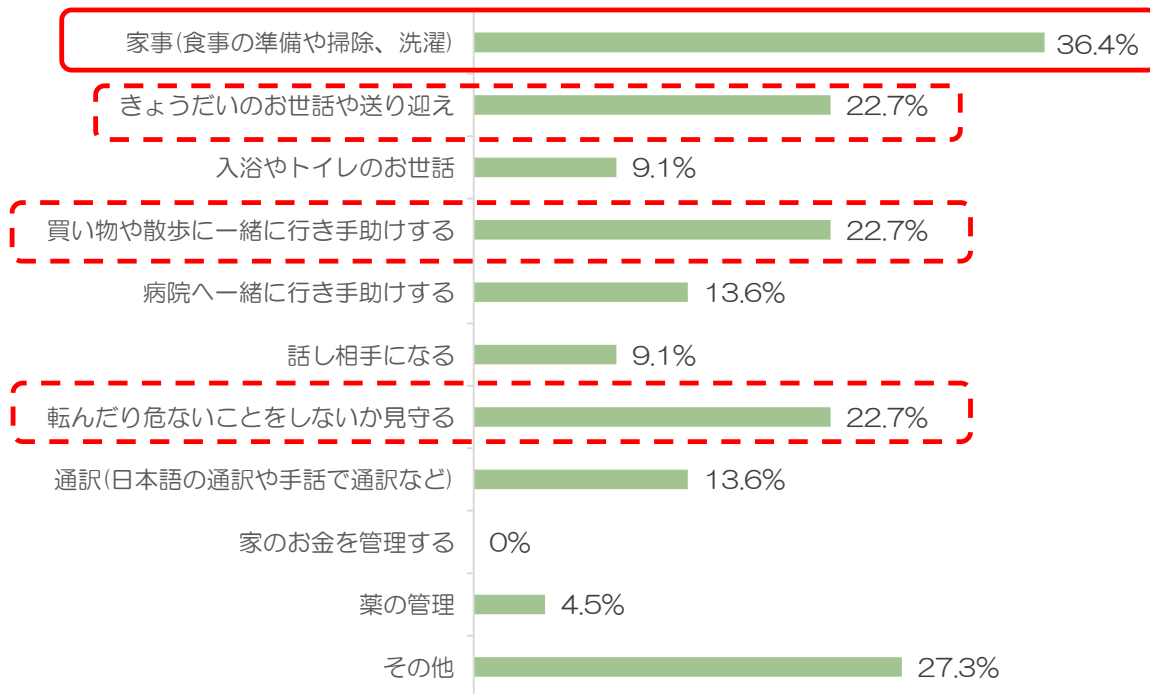
2 調査結果

(2) お世話の内容

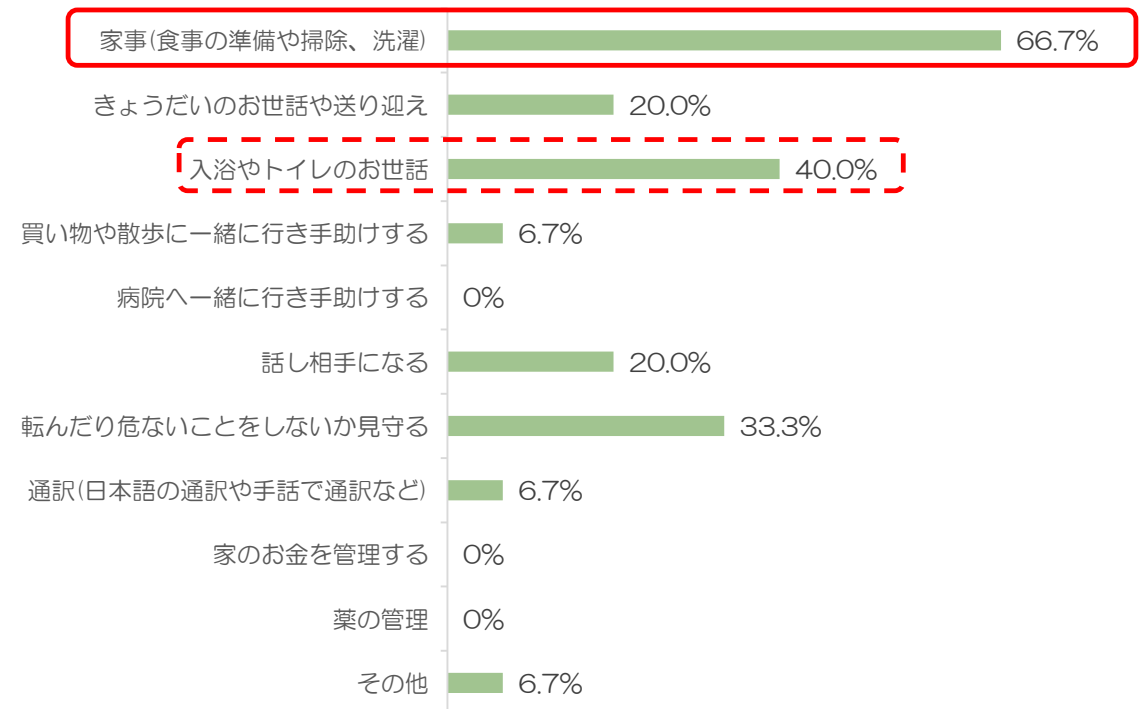
小学生・中学生のいずれも「家事(食事の準備や掃除、洗濯)」が多く、全体的にはきょうだいの世話に関する内容の割合が高い傾向。

※複数回答のため、パーセンテージは100を上回る

【小学6年生】 (n=22)



【中学2年生】 (n=15)



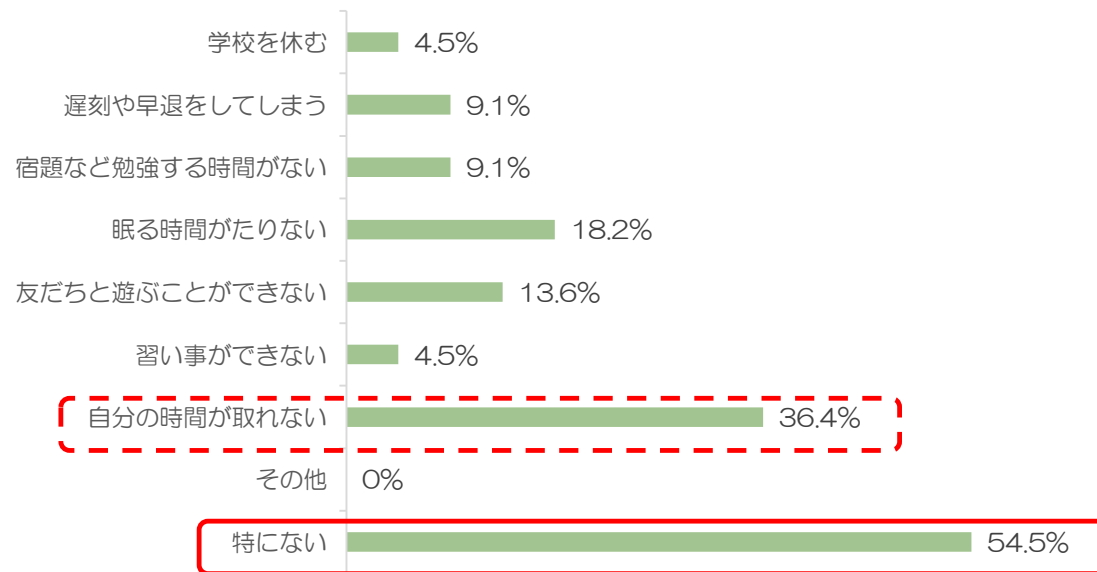
2 調査結果

(3) お世話をすることによる学校や生活への影響

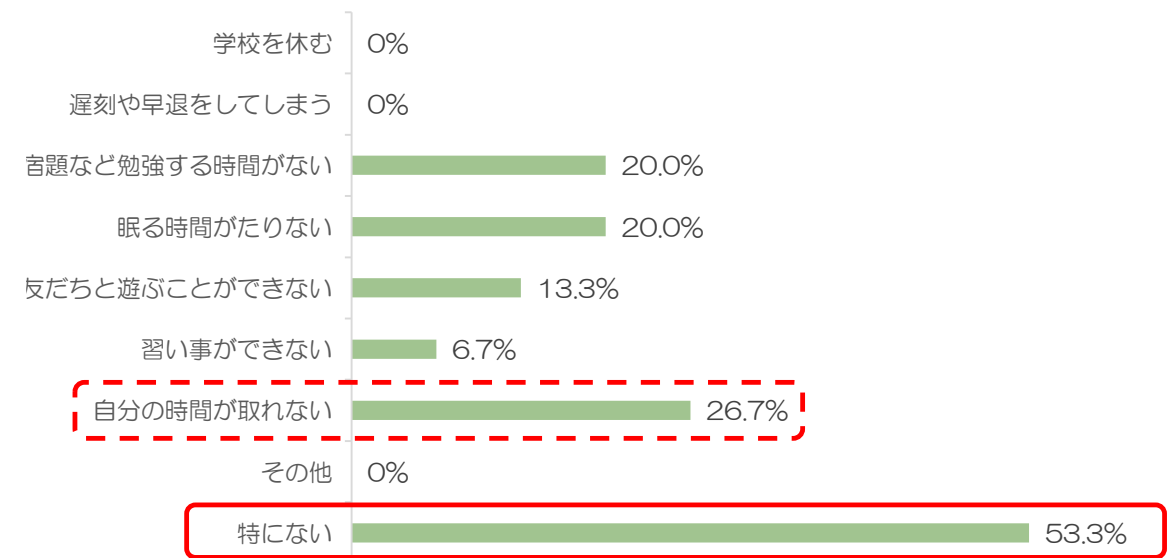
お世話をすることによる学校や生活への影響について、「特にない」とする回答が最も多く、次いで小学生・中学生ともに「自分の時間が取れない」とケアに負担を感じている。

※複数回答のため、パーセンテージは100を上回る

【小学6年生】 (n=22)



【中学2年生】 (n=15)



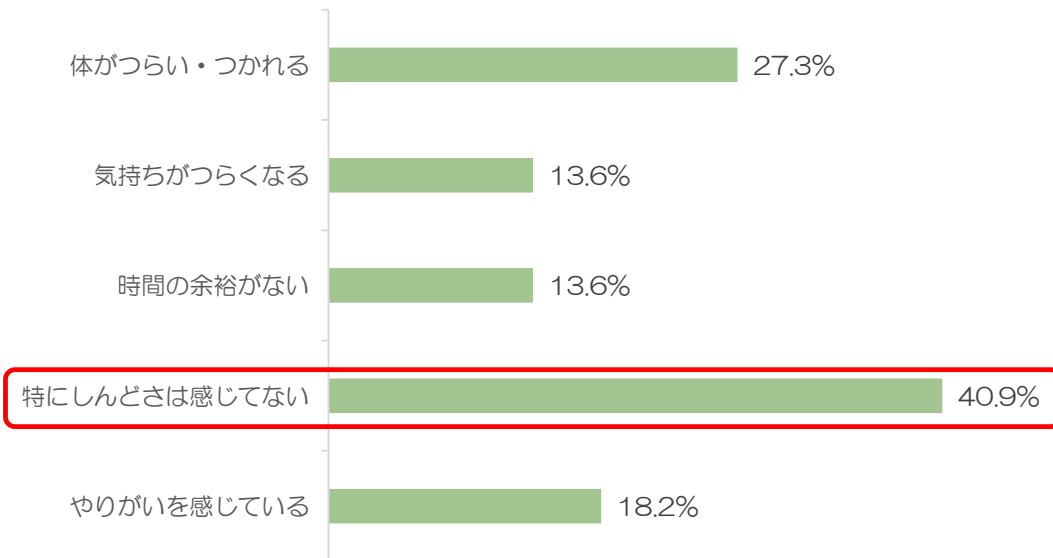
2 調査結果

(4) お世話をすることの大変さ

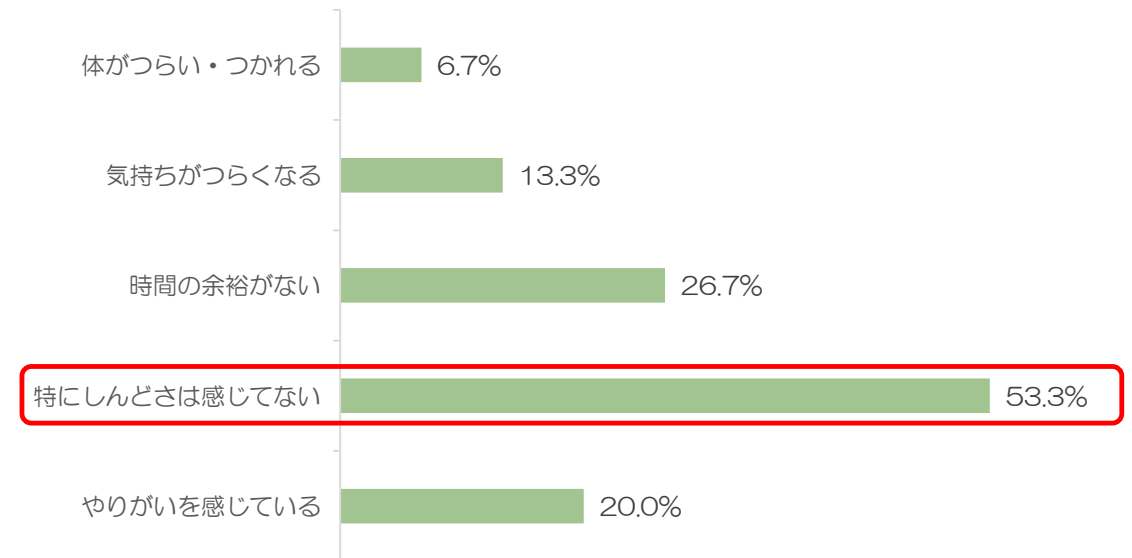
お世話をすることの負担感については、「特にしんどさは感じていない」と答えた割合が最も高い。「やりがいを感じている」と回答する割合も比較的に高い傾向がある。身体的、精神的な負担感を感じると回答することも多い。いずれの回答にも、家族のケアが日常化している可能性がある。

※複数回答のため、パーセンテージは100を上回る

【小学6年生】 (n=22)



【中学2年生】 (n=15)



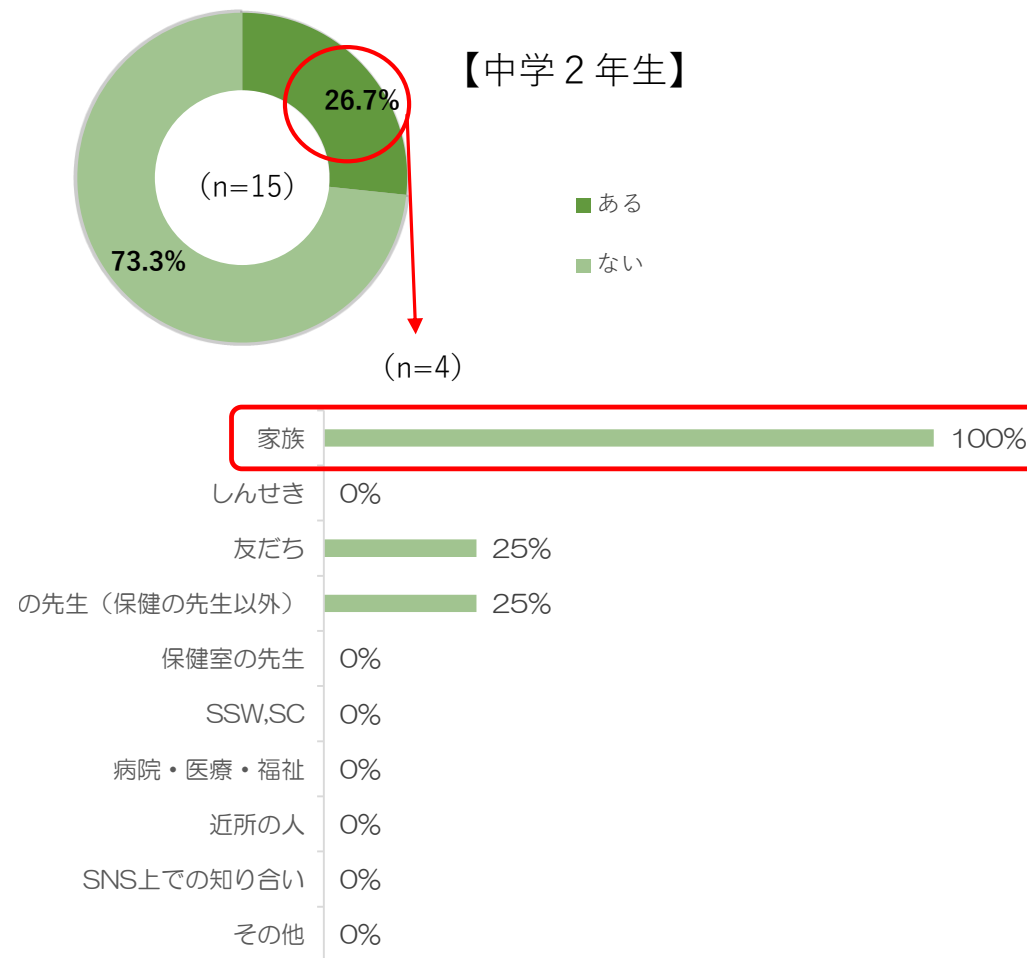
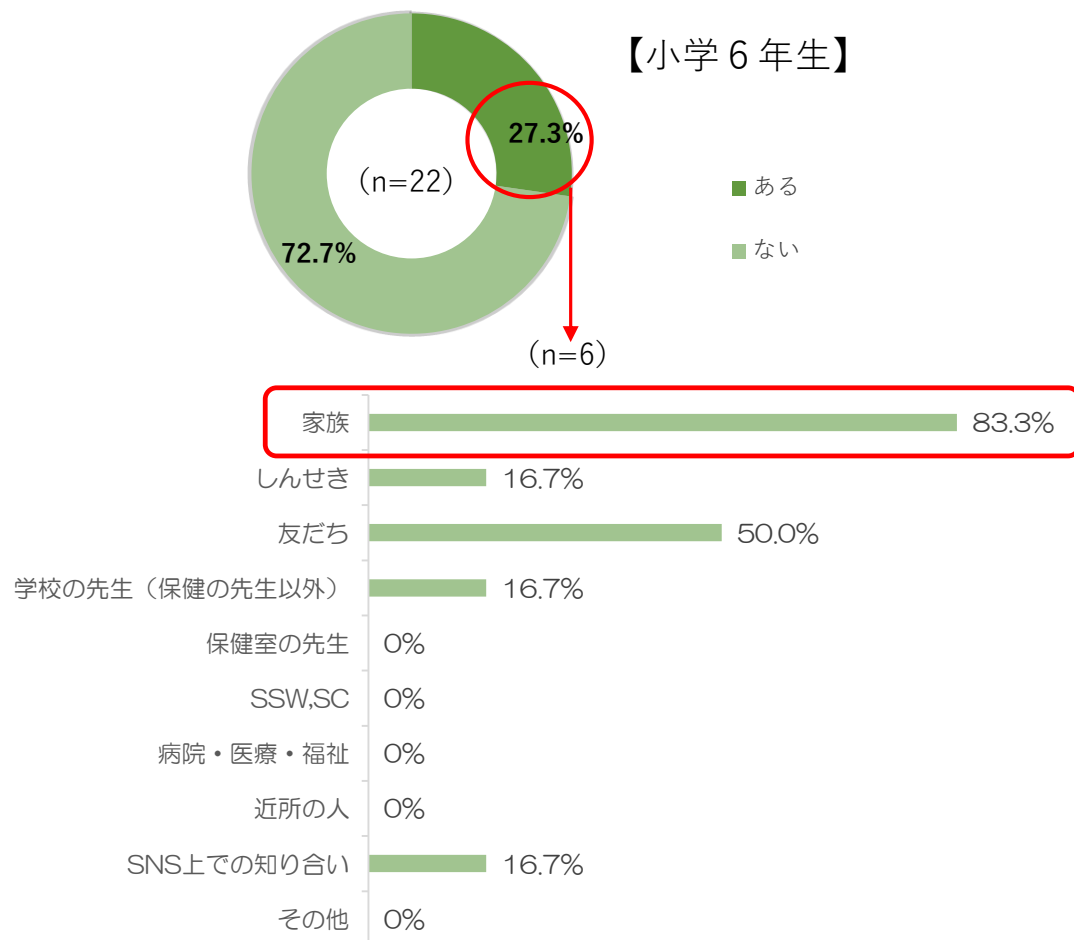
2 調査結果

(5) 相談したことの有無（相談相手）

こどもたちにケアの負担が生じている一方で、お世話について相談したことがない傾向が高く、小学生・中学生ともに7割が「相談したことがない」と回答。

※SSW（スクールソーシャルワーカー） SC（スクールカウンセラー）

※複数回答のため、パーセンテージは100を上回る



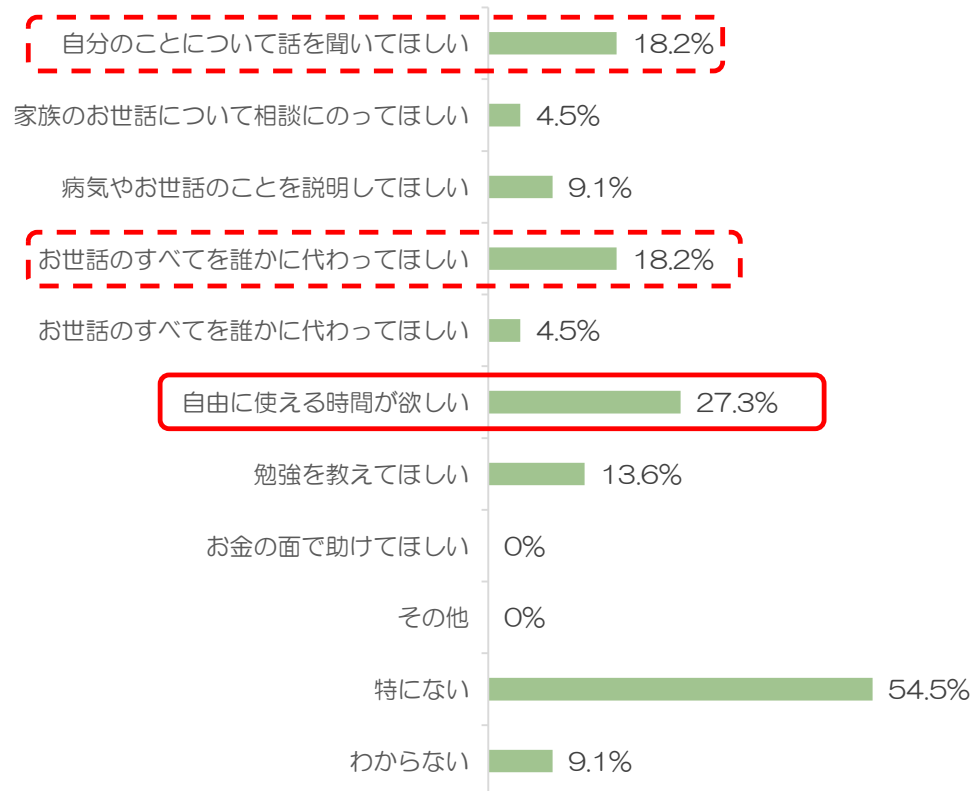
2 調査結果

(6) 周囲に期待する支援

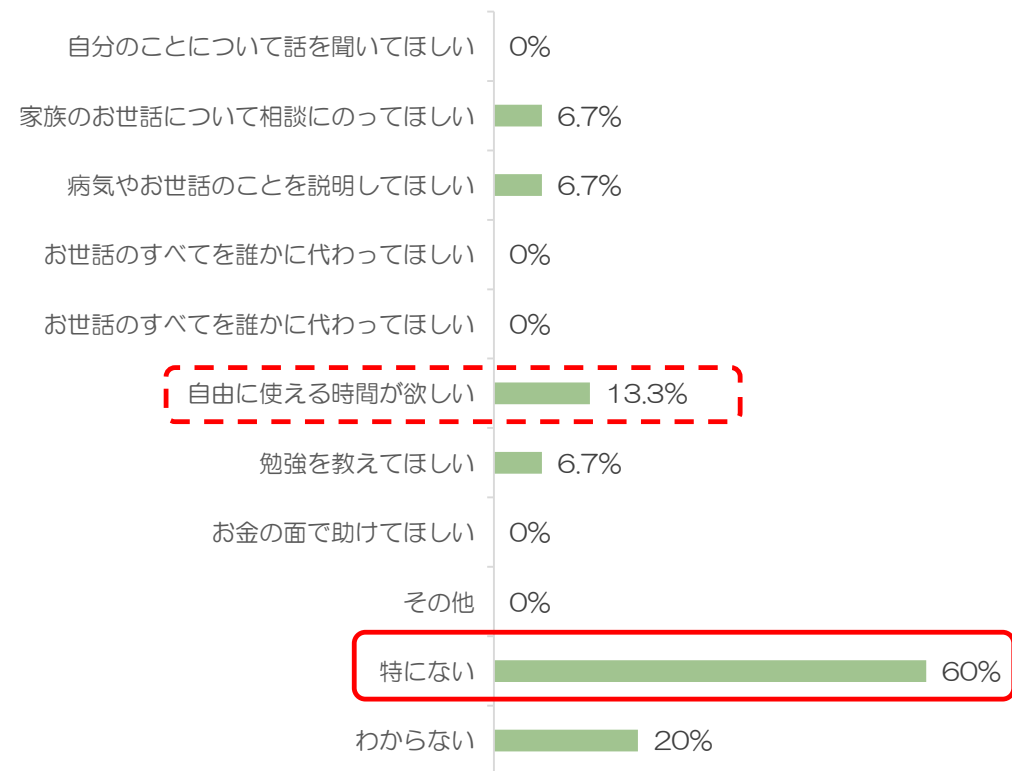
ケアに負担を感じているが、「特にない」「分からない」という回答が最も多い。「自由に使える時間が欲しい」との割合も高いことから、ケアに割いている時間も長いと推測できる。勉強などのサポートを必要とする回答も一定数見られる。

※複数回答のため、パーセンテージは100を上回る

【小学6年生】 (n=22)



【中学2年生】 (n=15)

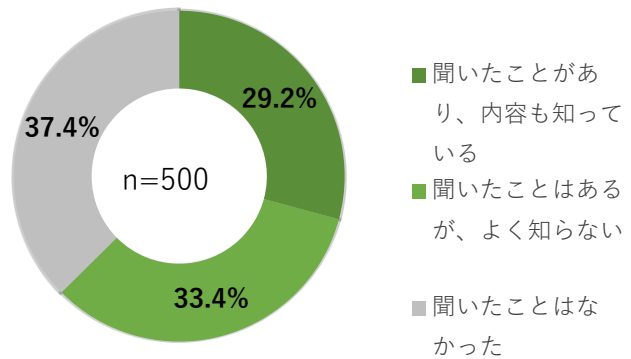


2 調査結果

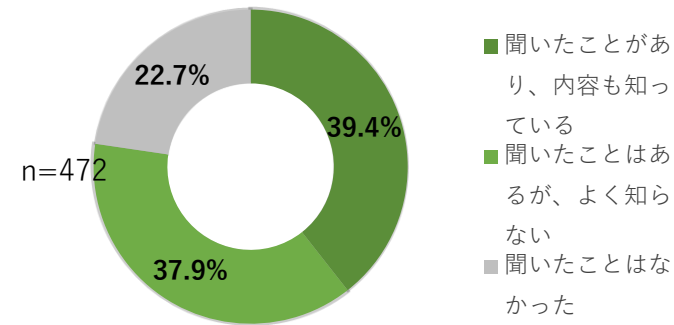
(7) ヤングケアラーの認知度

「聞いたことがあり、内容も知っている」小学生は約3割、中学生は約4割となっている。「ヤングケアラー」という言葉を聞いたことがあるだけの回答も含めると、小学生は約7割、中学生は約8割の認知度である。令和2年度の国調査では、「聞いたことがあり、内容も知っている」中学2年生は6.3%で、認知度が高まっていると考えられる。

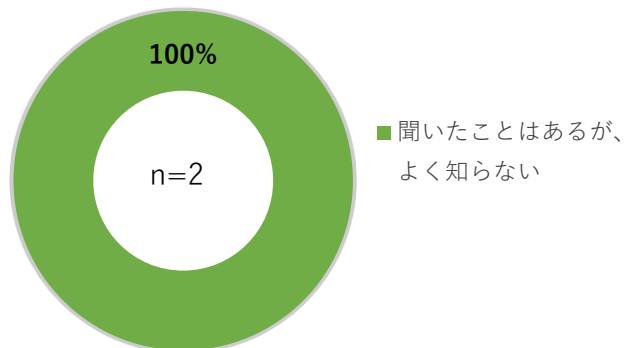
【小学6年生】



【中学2年生】



【高校生相当】



参考：令和2年度 ヤングケアラーの実態に関する報告書（MUFJ）

図表-96 ヤングケアラーの認知度

| | 調査数 (n) | 聞いたことがあり、内容も知っている (%) | 聞いたことはあるが、よく知らない (%) | 聞いたことはない (%) | 無回答 (%) |
|------------|---------|-----------------------|----------------------|--------------|---------|
| 中学2年生 | 5,558 | 6.3 | 8.8 | 84.2 | 0.6 |
| 全日制高校2年生 | 7,407 | 5.7 | 6.9 | 86.8 | 0.6 |
| 定時制高校2年生相当 | 366 | 6.0 | 7.7 | 85.5 | 0.8 |
| 通信制高校生 | 446 | 8.1 | 7.8 | 83.9 | 0.2 |

※通信制高校生は「18歳以下」と「19歳以上」の合計

2 調査結果

- (8) ヤングケアラーへの支援を広げていくために必要だと思うことや要望
小学6年生・中学2年生・高校生相当を対象に、自由記載形式で質問

啓発・理解の促進（58名）

動画、アンケート、メディア等を通じてヤングケアラーについて周知し理解することが必要との回答が最も多かった。

「社会全体がヤングケアラーについて理解すること。」

「定期的なアンケートで調査する。」

「学校だけでなくみんなが見ているようなSNSやテレビなどで放送してもっと知るべき場所を増やせばいいと思う。」

ヤングケアラーを支援できる環境をつくる（51名）

ヤングケアラーが相談・休息できる施設やケア対象者を預かれるサービスを求める回答が多くみられた。

「ヤングケアラーの人も遊べたり、学校へ行けたりできる環境を作るのが必要。」

「ヤングケアラーに自分の勉強の時間や睡眠の時間を確保してほしいから、お金を払わなくてもいける介護施設や子どもを預けられる施設をつくってほしい。」

「支援給付金制度などをつくる。」「ヤングケアラーの人が頼みやすい相談しやすい場所がもっと必要だと思う。」

2 調査結果

話を聴く、寄り添う（40名）

「相談できそうな人を紹介する。」「その子が少しでも楽できるようにする。」
「周りの友達にヤングケアラーがいたらすぐに気づいてあげられるようによく友達を見ておく。」

学校で学ぶ、相談する、支援体制をつくる（21名）

こどもたちにとって最も頼りやすく身近な大人である先生に知ってもらおうという回答が多かった。

「もし自分がヤングケアラーだと思ったら周りの人や学校の先生に伝えることが大切だと思いました。」
「学校で早期発見して相談支援体制の強化が大切だと思う。」
「ヤングケアラーの人達がオンラインで勉強ができるようにする。」

こども食堂を広げる（19名）

こども食堂を「相談できる場所」「安全にこどもが過ごせる場所」と表現し、「こども食堂を増やすことが必要」とした回答が見られた。

「こども食堂のような安全に子供を預けれる場所などがもっと必要だと思いました。」
「こども食堂などでヤングケアラーの人が心身を休憩できる場所がもっと増えればいいなと思いました。」

3 考察

1. ヤングケアラー調査

前年度の調査対象者は小学5、6年、中学生、高校生年齢相当としたが、今年度から対象を小学6年生、中学2年生、高校生年齢相当に絞り、設問数も減らして実施した。それにより、設問の意図を正確に理解できる層が増え、回答の精度が向上する結果は得られた。また、前年度同様ヤングケアラーの説明動画の視聴後にアンケート調査に回答したことで、概念の理解度の均質化が図れた。しかし、ヤングケアラーを「ペットの世話も含む」と解釈した回答が一定数見られたことに加え、学校へのフィードバックにて「ふざけて回答した」「理解せずに回答した」と思われる児童生徒もいたことから、データの信頼性に一部影響を受ける結果となり、調査の課題であると考えられる。そのため、今後もアンケート調査後の学校へのフィードバック・聞き取りをすることで、より正確かつ多角的な実態把握をすることが不可欠である。

高校生相当年齢の回答がほぼ得られていないが、全域的な傾向であり、来年度以降は県主体で実施することになっている。

3 考察

2. ヤングケアラーの実態

調査回答者全体（974名）のうち3.8%（37名）が家族の世話をしていると回答。家族の世話をすることによる、学校や生活への影響について「特にない」とする一方で、負担感の設問では、「身体的・精神的な負担を感じている」とする回答もみられる。過度な世話が日常的なものになっており、負担の認識自体が薄れている懸念がある。ヤングケアラー自身が自覚しにくい点を踏まえ、周囲の大人や学校が注意深く観察し、早期に支援につなげる体制やしきみづくりが重要と考えられる。

3. ヤングケアラーの 周知・理解

ヤングケアラーの認知度は、令和2年度の全国調査と比較すると高い結果だった。また、「内容も知っている」と回答した中学生は、前年度と比較し倍増していることから、本アンケート調査を通じた啓発活動も効果をあげていることが示唆される。しかしながら、「聞いたことがあるだけ」の層も多くおり、知名度と内容理解の間にはギャップがあることが推察される。自由記載にて「啓発・理解の促進」にかかる意見が、多く寄せられたことから、ヤングケアラーの理解が広く普及するよう引き続き周知・啓発を行う必要がある。また、小学生での認知度が中学生に比べて低いため、低学年からわかりやすい形での啓発を強化する必要がある。周知の具体的な方法としては、「絵本・動画の活用」「小学生向けのポスター掲示」「学校の授業などで学ぶ機会を持つ」などで、視覚的に分かりやすく親しみやすい方法を用いて取り組みたい。

3 考察

4. ヤングケアラーの把握

家族の世話について「相談をしない」と回答する割合が高く、また「相談する」と回答したこどもは、相談相手を「家族」とする傾向があった。家庭内のデリケートな問題は学校や行政などの外部の相談・適切な支援につながりにくい状況にあると考えられる。

一方で、アンケート結果から、こども自身がヤングケアラーを見つけられるよう「友達の家庭環境を理解する」「友達がヤングケアラーかと思ったら少し聞いてみる」とヤングケアラーを理解し、共感する意見があがっている。こどもたちに理解が広がることで、ヤングケアラーに気づきやすくなり、近くのおとなへ橋渡しすることも考えられる。「相談しやすい場所が必要」との意見も多かったことから、地域の相談できる場所や学校での相談体制を周知（拡充）するなど相談しやすい環境づくりが求められる。また、社会全体に啓発周知することで、地域での日常的な見守りなど多様な接点が増え、相談しにくいこどもたちも支援の網にかかる可能性が高まると思われる。

5. ヤングケアラーの支援体制

アンケート結果から本人や周囲の認知不足がヤングケアラーの早期発見及び支援の障壁であることが明らかとなった。また、こどもたちは相談先として学校の先生の存在を大切にしていた。そうした環境を支えるために、専門的な相談窓口・利用できるサービスの周知がより一層期待される。地域社会全体でヤングケアラーを支える意識を高めることも重要で、啓発活動や地域の連携強化が求められている。これらを踏まえ、ヤングケアラーが安心して支援を受けられる環境づくりの整備に努める必要がある。